The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多様性のある社会集団における曖昧性の効用 : オーケストラの事例から
Author(s)	正井, 佐知
Citation	年報人間科学. 2021, 42, p. 47-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78350
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

多様性のある社会集団における曖昧性の効用
── オーケストラの事例から

正井 佐知

論文要旨

本稿では、地域住民、青少年、障害者、高齢者、外国人など多様なバックグラウンドを持つ人たちが参加し、30年間活動をしているオーケストラαの運営について、αの特徴である曖昧性に着目して研究を行った。曖昧性は従来の組織研究では排除すべきものとされてきたが、αでは非常に多くの場面で曖昧性が見られた。そこで、αでは曖昧性がどのように用いられ、αにとってどのような意味があるのかを明らかにするため、組織内外の公式な規則・事実記述における言語表現の分析を行った。その結果、曖昧さは（1）その場ごとの状況や経年変化に対応しやすい点、（2）同調圧力、規範性を低減する点、（3）障害の有無を開示をせずとも配慮を前提にした組織となっており、すべての団員にとって無理せずに参加しやすい場が確保されている点、（4）社会福祉や障害者の社会参加といった問題に関心のない人からのアクセスを確保している点で、αにとっては合理的な実践であると結論付けた。

キーワード

曖昧性、組織、障害者、高齢者、社会的包摂

1．はじめに：多様性のある社会集団の運営

2012年1月に筆者はαという音楽団体を見学した。αは2012年1月時点で約20年間活動する市民オーケストラであり、地元の奏者、障がいのある奏者、高齢の奏者、青少年の奏者、外国人の奏者などが参加していた。見学して感じたのは、αには形容しがたい不思議な緩さが漂っていることであった。この不思議な緩さは、筆者がそれまでに参加してきた幾つかの音楽団体には無いものである。2012年から9年間参加するうちに曖昧さは、αの重要な特徴でありその活動内容と結びつきがあるのではないかと考えるようになった。本稿では、αに漂う不思議な緩さについて、組織における曖昧性の議論を手掛かりに論じてみたい。

先述したようにαには、多様なバックグラウンドを持つ人たちが参加している。多様性のある組織の運営については、ダイバーシティ・マネジメントの議論が知られている。それは、国籍・性別・年齢・性的マイノリティなど多様な背景を有する人をマネジメントすることについての議論であり、人種差別問題の

解決を模索するアメリカで特に発展してきた。アメリカでは多様性のあり方が、雇用機会均等やアファーマティブ・アクションの対象から生産性・企業価値の向上に結びつく対象へと, 変化していったとされる（谷口 2003; Erin and Dobbin 1998）。ダイバーシティ・マネジメントの考え方は日本でも取り入れられ、生産性の向上と関連づけて議論がなされている。生産性という観点は、営利企業が多様な人材を雇用することを後押しするうえで不可欠なものであろう。

近年では、ダイバーシティ・マネジメントの考え方は障害者雇用にも応用されることがある。例えば、障害のある社員が能力を発揮できるように社内規定を改定すること等で適切なシステムが構築された事例が報告されている（牛尾・志村 2018）。他方で、ダイバーシティ・マネジメントは競争優位性や組織パフォーマンス向上という視点を含むため、適用方法によっては障害者雇用と整合しないという指摘もある（有村 2014）。

本稿で取り上げるαは、多様なバックグラウンドを持つ人が参加している任意団体であり、効率性や生産性ではかることが必ずしも適切とはいえない団体である。企業のダイバーシティ・マネジメントは生産性の向上に主眼がある一方で、αは組織の持続や規模の維持等に重点を置いている。また、αでは、先行研究のような積極的な組織改革が見られないうえ、組織運営はとても緩く曖昧なものとなっているように見える。

2．先行研究と本稿の位置づけ

2.1 組織運営と曖昧さ

どのような組織であっても曖昧さは存在している。このような曖昧さは従来の組織論では、可能な限り排除すべきものとして捉えられてきた。しかし、Eisenbergは1984年の論文で、曖昧さの有用性を論じる文献が徐々に増加していることを指摘している。例えば、Davenport and Leitch (2005)は、曖昧さを利用することを戦略的曖昧性(strategic ambiguity)と呼び、「利害関係者による複数の解釈が可能で、複数の利害関係者の応答が可能な『空間』を作成するための戦略的コミュニケーションにおける曖昧さの意図的な使用」と定義している。Eisenberg (2007)は、戦略的曖昧性を「言語のリソースを使用して、包括的かつ重要な違いを維持する方法でコミュニケーションをとる人間の能力」であると積極的に評価している。

それでは、曖昧さはどのような形態で存在しているのだろうか。その一つの形態としてコミュニケーションがある。コミュニケーションの主要な媒体は言語である。Eisenbergらが指摘するのは、言語使用に伴う曖昧さであると考えられる。さらに、言語表現における曖昧さにはいくつかの種類が考えられる。まず第１に多義的な曖昧さである。多義性は複数の解釈を許容する言語表現である。第2に省略的な曖昧さである。省略は本来述べられるような内容を述べない言語表現である。

曖昧性の戦略的な利用は、例えば公式規則によく見られるという。公式規則には、しばしば「曖昧で不明瞭」なコンテンツが含まれているが、曖昧さと正確さのバランスをうまく取ると、利害関係者の間で「統一された多様性」(Contractor and Ehrlich 1993; Eisenberg 1984)を保つことに寄与する。そのため、「戦略的曖昧性は組織の使命、目標、計画にしばしば見られ、多様な解釈を共存させ多様なグループが協力する

ことを可能にする」(Eisenberg and Goodall 1997)。また、解釈を変えることにより、組織の変化を促進する(Eisenberg and Goodall 1997)。ただし、Edenfield (2018)が指摘するように、曖昧性と正確性のバランスが崩れると機能不全にも繋がるため、戦略的曖昧性が効果的に働くかは組織の規模や組織の成長段階、文書の種類などによるとしている。例えば、ベンチャー企業、小規模な非営利団体、コミュニティ組織など小規模な組織では、柔軟な業務記述書が戦略として成功する場合がある(Edenfield 2018)。

以上のように、言葉が複数の解釈を可能にすることを考えると、言葉の運用における曖昧さは人々が協力するための重要な装置であるといえる。そして、言葉が公式性・規範性を持つときも、人々は言葉の曖昧性を利用してその解釈を変容させるのである。公式性に着目することは曖昧性を浮き上がらせる一つの有用な方法といえそうだ。そこで本稿でも、公式性と言葉・コミュニケーションに着目することとしたい。

2.2 組織における曖昧性研究の視点

Eisenberg (1984：237)は、組織における曖昧性を観察するには表1のような4つの視点があるとしている。セルⅠでは、主に公式の規約や定款などの文書に着目することが多い。そして、曖昧さが多様性の統一を促進し、特権的な地位を維持する方法に研究の焦点を置く必要があるとしている。セルⅡでは、対人関係の発達において曖昧性がどのように使用されるかに焦点を当てるべきとしている。これらの種類のコミュニケーションは通常口頭であるため、研究の主要な方法は会話分析となる。セルⅢの研究の焦点は、将来のオプションの保持と、外部者に対する正式な声明の否定にあるとされる。セルⅣでは、曖昧さを戦略的に利用して、内密で高度に政治的な組織間連携を開発する方法に焦点を当てる必要があるとしている。

本稿では公式性に着目するため、セルⅠとⅢの視点を参考に分析を行う。先に見た研究は企業や行政における組織内外の公式なコミュニケーションに注目している。これに対して、本稿では企業や行政とは異なる社会集団を対象に同じ枠組みで分析を行い、新しい知見を得ることを目指したい。そして、αにおいて緩さ、曖昧さがどのように用いられているか、多様性のあるメンバーが参加する場にとってそれはどのような意味があるのかについて特に着目し、分析を行う。

表 1　戦略的曖昧性の研究対象に適したコミュニケーション文脈の諸次元（Eisenberg 1984：237）

		公式性	
		公式	非公式
組織	内部	Ⅰ　目標、ミッション 規則、規制 方針、手続き	Ⅱ　会話 グループディスカッション 組織のストーリーテリング
	外部	Ⅲ　広報 広告 販売 組織間協定	Ⅳ　非公式協定 弱い結びつき OB ネットワーク 役員の重複

3．研究の方法

3.1 分析方法

曖昧さがどのように用いられているかを見るために、αの組織内外における「公式なもの」の言語表現に着目する。分析の前半では、セルⅠに該当する団則という規則についての言語表現を扱う。そして、分析の後半ではセルⅢに該当する団の紹介・広報における言語表現について扱う。団の紹介と広報はαの事実や歴史について述べることでもある。

前半で検討する規則の曖昧さについては色々な組織で見られる。例えば、Garfinkelはロサンゼルスの自殺防止センターで、職員たちが死亡ケースを規則である「自然死・事故死・殺人・自殺」に分類する様子を観察している。そこでは、死亡ケースは状況に応じて多義性をあえて招くように分類されていた(Garfinkel 1967: 14)。また、Zimmerman (1971) は行政の受付係が、「申込者を順番にケースワーカーに対して割り振ること」という規則を守っていない様子を観察している。これらの事例からは、規則には複数の解釈とそれを適用するための書かれていない条件が付帯していることが示唆される。したがって、規則を文字通り捉える視点からは、規則の運用が曖昧に見えるのである。

後半では、団の紹介・広報について検討するが、ここでは「記述(description)」に着目する。「記述(description)」は、物事がどのようになっているかを記述することであり状況に応じてなされる。例えば、裁判の際に、訴訟当事者は「何があったのか語り」、「誤った情報を正し」、「議論を行い」、「指摘を認め」、「他人のせいにする」が、これらの行為は「事実」の記述によってなされる(Pomeranz 1987：227)。例えば、「洪水は3月11日の早朝に起きた」と「洪水は3月11日の朝2時に起きた」の記述では、特徴づけが異なる(Pomeranz 1987：237-238)。この記述は、裁判行為を達成するために状況に応じて変化するのである。したがって、このような記述とそれが記述された状況は分析の「指標(indicate)」として、人々の方法を焦点化するための装置となる(Pomeranz 1987：241)。以上を踏まえて、言語表現についての分析と、エスノグラフィックな分析を合わせて行う。

3.2 オーケストラα

オーケストラαは、約30年間に渡り活動をしている市民オーケストラである。地域に根差した活動を行い、地方自治体のイベントや、高齢者施設・障害者施設でのボランティア演奏を行っている。2013年1月から2019年9月では10代から80代までが在団しており、通常の練習への参加者は20人ほどと少人数で活動している。また、慢性疾患や障害のある奏者が参加していること、音大出身者から楽器を始めたばかりの初心者まで様々な演奏レベルの奏者が参加していること、演奏者以外にも事務スタッフが参加していることもその特徴である。過去には外国人の団員も参加していた。

創設者である代表によると、αは、生演奏に触れる機会のない人、特に入所施設に居住している障害者や高齢者に出張演奏を無料で行うことを目的に活動を開始した。活動を行ううちに、代表者に障害があるということから、障害のある団員も徐々に入団するようになった。その後、自然災害のために団員が減少

したものの活動は継続し、最近になって手話コーラスの団体と一緒に活動するようになった。

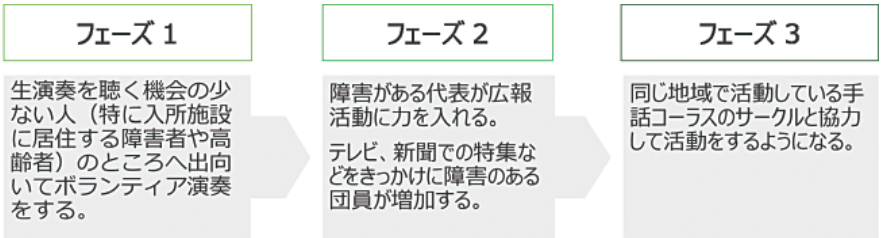

図 1　団体の時系列（約 30 年）

αでは、2013年1月から2019年11月まで参与観察を行った。また、2014年5月から2015年3月までビデオ撮影を行った。筆者は2016年3月からαの管理的なポストの一人として渉外業務を行ってきた。具体的には、外部者に団体をどのように見せるのかという印象を考慮する役割の一部、そして、外部者からの連絡をチェックする役割を担っている。本稿では、αの一員、αの歴史の一観察者として記述を試みる。団体の内部者が観察することで、外部の観察者の立ち位置からだけでは窺い知れない内実について可能な限り記述したい。

4．団内秩序と曖昧性

4.1 団内の規定

最初に、表1のセルⅠにあたる内容について見ていきたい。αには設立の3年後に制定され、14年前から改定されていない団則と呼ばれる書類があり、団体の目的・活動内容、団員の資格・権利、会議の方法、運営などについて18条にわたり定められている。これらの団則が、活動の中で言及されることは殆どない。第5条に定められた役員は代表（団長）以下の役員は長年不在となっているし、団則上は重要な位置付けになっている総会も2019年12月時点で5年間開かれていない。

4.2 団員資格とメンバーシップ性

αには、入団希望者の演奏レベルを測る入団テストは無いため、音楽合奏か団体運営を行いたい人であれば誰でも参加可能である。入団する際には入団届を書く必要がある。そして、退団する際は原則として退団届を提出することが定められている。

> 第４条３項　退団希望者は退団届を作成し、団長に届け出る。メール等書面にて団長に連絡することも可とする。

2013年1月に代表に退団について訊ねたところ、退団届は無いとの返答を得た。これについて、代表は

「来るもの拒まず、去る者追わず」と理由を述べた。このように第４条３項の後段しか活用されておらず、また、練習に来なくなった団員にも退団希望か否かを確認していないため、何名の団員が在団しているかが分からない組織となっている。代表に団員の数を問うと、「退団届けがないからわからない。最近来てない人も含めると200名くらいかな」との回答であった。ちなみに、2016年4月に運営スタッフとしてαの全体像を把握するために3年以内に練習に参加したことのある人を著者がリスト化したところ55名であった。ただし、3年以内の参加歴がメンバーの要件であるのかという境界線も不明である。例えば、関東地方への転勤のため練習に来なくなっていた人が、3年以上参加していなかったにも関わらず、突然参加していたりすることがある。現在参加している団員も、気軽に欠席や数か月～数年単位の休団を繰り返しているし、1年に1度気が向いたときに参加する団員もいる。また、かつては毎回参加していたが、現在はコンサートの際のエキストラとして参加している人も数名いる。このように、αでは退団規定が一部だけが活用されている。また、フェードアウトした可能性のある人への対応は特に行わず、またいつ来ても良いというような、規定とは別様の方法が生み出されている。それにより、団員から見ても、αのメンバーシップ性は非常に曖昧なものとなっている。

4.3 曖昧さと事件

活動頻度や活動拠点、団費の金額といった項目は利用されている数少ない団則である。このうち、団費は１か月ごとに徴収されることになっている。しかし、その運用基準は個人の裁量に委ねられている部分がある。

A　「これって、２か月休んでた間も払うんですかね。」
筆者　「払わなくていいと思います。」
A　「え、なんとなく今まで払ってた。」
B　「私も。」　(2019年5月12日)

このように、複数の解釈が許容されている結果、団員の自己判断によって支払いの基準が異なる事態が起きている。また、参加率が低い団員は団費の支払いが１年ほど遅れる人もいる。以下の団則は全く使われていない。

第４条４項　団費を滞納（滞納期間６ケ月以上）している長期欠席者は在籍継続意志を確認の上、休団もしくは退団手続き行う。

金銭管理について曖昧さがあることで「事件」も起きている。「事件」の詳細を書くことはできないがαの活動資金が全て消失したことがあった。それは、銀行預金の約数百万円であった。この事件が起きた理由は、総会が開かれていなかったため、そして、経理について団員間チェックの機能が働いていなかっ

たためである。このように、規則に対して複数の解釈が許容されたり、別の方法が運用されたりするといった曖昧性が存在していることで、αにとって好ましくないことも起きている。

4.4 インクルーシブな場と曖昧さ

前述したようにαには、どのような人も参加可能である。障害のある奏者だけを特段募集しているわけではないが、障害のある奏者が参加していることが団員や福祉関係者や音楽関係者を通じて広まった結果、障害のある人またはその家族がアクセスし入団している。また、ホームページに代表の障害について掲載してあるため、これを見て障害のある人がアクセスすることもある。障害のある人以外にも持病のある人や高齢者や楽器の初心者などいろいろな団員が在団している。団員の多様性について記述されていると思われるのは次の団則である。

> 第２条（目的・趣旨） 本団は障害の有無、年齢にかかわらず、音楽による社会貢献を目的とし、障害者福祉・高齢者福祉・生涯学習・地域文化活動・青少年児童育成・国際交流など広い視野にたった活動を行う。

第2条の「障害の有無、年齢にかかわらず」は団員についてなのか音楽による社会貢献の対象についてなのかが明確ではなく、複数の解釈を可能にするという曖昧性がある。図１で見たようにαの活動では、最初から障害のある団員達が参加していたわけではないため、「障害の有無、年齢にかかわらず」は改定の際に加筆されたと思われる。また、「音楽による社会貢献」という目標と、それを実現するための活動も非常に広く設定されている。この団則は14年以上改定されていないが、代表が希望する現在の方向性は次のようなものである。

> 「やっぱりあのちゃんと社会貢献できること。ちゃんと社会貢献できる。ただしニーズでですね、全員がそのつもりになる必要はない。堅苦しくなくね。とにかく楽しんで。ちょっとでも、ね、社会貢献できたらええいう人もOKやし真剣にね、悩んでくれはってもいいし。うん、いろんな色でね、やればいいんじゃない。」 （2019年１月20日）

代表が希望する団体の方向性は現在も「社会貢献」である。しかし、代表は雑誌のインタビュー等で訊ねられればこのように返答するものの、団員が集まる場でこういったことを発言したり、目標として掲げたりして団員を鼓舞することもない。「全員がそのつもりになる必要はない」、「いろんな色で」すれば良いという。したがって、αの方向性は企業の定款のように定まっているわけではなく、特に強調されることのない曖昧な目標として存在しているといえる。

αは第一義的には音楽合奏の場でありながら、多様な人が社会参加する場として、そして、出張演奏を行うボランティアの場としても機能している。ただし、福祉的な側面は後景化しており、団員それぞれの

スタンスで参加することが可能となっているのである。

各自のスタンスで参加する場であり、福祉的な側面が後景化しているのは次のような代表のやり方にも表れている。団員は、病気や障害の情報について、全員が代表や団員に申告しているわけではなく、申告をする必要もない。代表はメンバーの障害や病気について知っている場合でも、どの人にどのような特性があるか、また、診断名や障害の種類といった情報は団員に共有されないし、団員間の会話のトピックにもならない。障害のある人にどのような接し方が適切かといったアドバイスの場もない。オーケストラαは教育や医療や福祉などの専門家が関与しない場である。規範的・専門的な知識ではなく、合奏練習への継続的参加によって団員メンバーのやり方を修正しながら維持しているのである（正井 2018）。

ところで、αには、可視化されない疾病や障害があり、その情報を非開示にしている人も参加している。著者もαで知り合った団員から1年後、3年後に障害について打ち明けられたことがあった。このような場合、「障害者」の○○さんという障害を起点とした関係ではなく、演奏仲間の○○さんには偶然障害があったという順序での関係が形成されているのである。障害や疾病の有無を開示しなくても、各自のペースで参加しやすい環境が保たれている。このように配慮を前提にした集団であることは、障害や疾病がない人が抱える様々な事情にもフレキシブルな対応を可能にし、全てのメンバーの参加しやすさにも繋がっている。

上記のように、福祉的な要素は後景化し団員の障害・疾病の有無は曖昧であるとはいえ、団員たちは集団の多様性を認識しているようだ。以下はあるバイオリン奏者の発言である。

「家から近いところのオケを探して入ったけど、日本には色んな人がいるんやなぁと思った。ここに入るまでは関りがなかったんよ。」（2016 年 11 月 5 日）

この発言では、特に福祉に関心が無くαに入団したが、障害のある団員等と関わることで結果的に多様性に目を向けることになる様子が示されている。上記の団員の他にも、αに入団するまでは福祉には関わりが無かったが、数年後に福祉職に転職した団員も存在する。

以上のように、公式規則・目標を通じαの曖昧性を見てきた。図1で見たようにαは活動が長期化するうちに活動の要素が増え、活動の主体も多様性を帯び、多義的な場となっている。多義的ではあるが、目標や方向性や規則が曖昧に解釈・運用されることで、集団としては活動の変化に対応しやすいといえる。また、各人のスタンスで参加すればよいという曖昧で適当な場であること、障害の有無は曖昧でも配慮を前提にした集団であることにより、同調圧力・規範性が低減されているといえる。これらの結果として、団体が一定の規模を維持できていること、より多くの人が団体にアクセスすることで障害のある団員との接点を持つ機会ができること、障害のある団員の社会参加や支援が無理のない形でできていること、究極的には障害者や障害者支援活動への社会的支援の機運が高まる可能性があるといえる。

5．外部との関係における曖昧性

5.1 外部者への公式な説明

本章では、表1のセルⅢにあたる部分について検討する。多様な人の参加・交流を一つの目標としている団体には課題がある。それは、参加者が固定化され、新しく参加するメンバーが少ないということだ。例えば、内閣府のウェブサイトに掲載されている「障害者に係る共生社会実践活動事例集」における「誰もが参加できる余暇活動」の事例として障害のある人とない人が芸術を通じた共同作業をすることにより障害への理解を促すNPOや任意団体の事例が提示されている。NPOや任意団体の課題として「普段関わりのない一般市民からの参加が低調」「余暇活動に参加する人が固定化してきている」点を挙げる団体が複数ある（内閣府 2009：23、25）。

確かに少人数でメンバーが固定化している方が安心して活動に参加できる人もいるだろう。しかし、対象者の社会参加という目的に加えて地域住民との交流をも目的としているような団体では、メンバーの固定化は一つの大きな問題となりうる。また、メンバーの固定化を問題としていない団体であっても新規メンバーの獲得はより安定的な活動費を確保するためにも重要である。

実際に各団体は、障害のある参加者を含む多様な参加者を確保するために様々な策を講じている。例えば、ホームページを作成したり、ボランティアセンターや社会福祉協議会に団体登録をしたり、チラシを配布したり、ポスターを掲示したりといったことである。

アマチュア・オーケストラの場合はホームページを見てから演奏会を見て入団する人が多いためホームページと演奏会の２つが重要となる。ホームページか演奏会を見てから入団する人が多いのは、αも同様である。アマチュア・オーケストラは全国に沢山あるため、どのように自分たちの団体を位置づけてアピールするかが重要となる。特に、オーケストラは活動費確保という目的の他、弦楽器、管楽器、打楽器の各パートが揃わなければ合奏できない曲が多く、各パートの人員を確保しておく必要がある。

5.2 観客とプログラム

αは年に5度ほどの小規模なコンサートを行う。コンサートは、自治体のイベントもしくは、福祉施設でのボランティア演奏を主体にしている。コンサートでは、その演奏会の種類、観客を予想してプログラムを構成する。そして、演奏の前にαについての紹介がなされる。紹介内容は代表が考え、イベントでの紹介は司会者が行うこともあるし、団関係者が行うこともある。通常のコンサートでは以下のような紹介がなされる。

【事例 1】

司会者「オープニングを務めるαを紹介させていただきます。αは、▲▲代表の、障害のある自分を支えてくれた**音楽で心のボランティア**をしたいという願いから**○○年の4月**に発足されました。そして、演奏曲目は、TVの演奏などでお馴染みのクラシックからアニメソング、その他歌謡曲までお客様のニーズに合わせた演奏をなさっています。そし

て、音楽と福祉をテーマになさっていますので、**手話コーラス**付きで演奏なさっていることが多いです。今日も5曲中の2曲ですかね、2曲、手話コーラスとお楽しみいただきます。それでは、早速、演奏をしていただきましょうか。演奏していただく曲は・・・・」(2014年11月16日)

事例1は、地元の複数の音楽団体が出場し、市民に楽しんでもらう目的の文化振興イベントである。アナウンスでは、団の立ち上げに代表の「障害」経験が関わっていること、そして、ボランティアを行い、手話コーラスを帯同している点で、福祉的な活動を志向する団体であることが示される。しかし、社会的包摂を志向することや障害のある団員が参加することはアナウンスされていない。

一方で、自治体等が主催するイベントや福祉をテーマにしたイベントでは紹介の仕方も変化する。それも、今後の団体の立ち位置を左右する関係者が来場するような場合は、次のように構成員や活動の趣旨までも述べられることがある。例えば、障害のあるメンバーが参加する団体であることが主張されることがある。

【事例 2】

司会者「それでは皆様お待たせしました。今日は暑い中、来ていただいてありがとうございます。え、ただいまからですね、○○市○○自主事業、町学講座の○○コンサートを始めさせていただきます。最初にですね、(楽器名)のAさん、Aさんです。(拍手)。プロフィールをいただいているので、こちらを読ませていただきます。Aさんは○○年生まれ、ただいま○○歳です。現在は○○に勤務しています。小学校の音楽の授業で(楽器名)と出会いまして、それから一番の仲良しになりました。(楽器名)のおかげでたくさんの人と出会い、教えていただきながら今日まで続けてこられました。今は月に一度、小学校の時に教えていただいた先生に再びレッスンを受けています。ジブリの曲が大好きです。(1.0秒)失礼いたしました。ジブリの曲が大好きですが、これから色んな曲にチャレンジしてレパートリーを増やしていきたいと思っています。続きまして、αの紹介をさせていただきたいと思います。えー、チラシにも書いてありますがαさんは、**音楽による心のボランティア**、これを目指して、**○○年に生まれた**オーケストラで、○○を拠点に福祉の受け手である障害者が演奏や運営の担当として活躍されているのが特徴でございます。ただいまご協力させていただいてます、えー、**手話**をしていただいている、後ろにもいらっしゃるんですけども、こちらは手話同好会の○○(団体名)さんでございます。よろしくお願いいたします。それでは代表の▲▲様にバトンタッチをさせていただきます。」

代　表「あ、生で行きます。今日はどうもありがとうございます。あの小さいところですので、楽しく演奏したいと思います。楽しんでください。よろしくお願いします。」

指揮者「みなさんこんにちは。本日は、第一回○○コンサートにご来場くださいまして、誠にありがとうございます。私は本日指揮司会を務めさせていただきます■■と申します。よろしくお願いいたします。(拍手)本日演奏しますαの皆さまです。えー、今回は短い時間なんですけど、前半にオーケストラとえー、小さい編成のメンバーなんですけども、最初に弦楽とフルートのアンサンブルを聞いていただいて、後半は心に響く(楽器名)との合奏でAさんに(楽器名)を弾いていただくということになっています。最後までゆっくりお楽しみください。これから演奏する曲は・・・」(2014年9月7日)

2014年9月7日のコンサートではまず、障害のあるメンバーのAさんについての説明がなされる。Aさんは障害の有無については紹介されないが、年齢、勤務先、楽器の先生、楽器歴などが紹介されることにより、Aさんに障害があることが聞き手に理解可能な説明となっている。

この次に、通常は「福祉の受け手である」と見なされる「障害者が演奏や運営の担当として活躍」して

いることが説明されている。最後に、手話コーラスの説明がなされる。これら一連の流れを見ると、いずれも障害関連的な説明がなされていることが分かる。社会的な意義づけにより、助成金事業として相応しい理由づけがなされているともいえる。

さて、事例1、事例2を合わせて観察すると、共通して「心のボランティア」、「○○年（創設年)」、「手話（コーラス)」という3つの記述(description)が提示されていることが分かる。3つの記述を見比べたとき、これらには論理的な飛躍があるといえる。

事例1の、「心のボランティア」は一般的な目標であって、そこから「手話コーラス」というトピックに至るためには説明が必要である。すなわち、「心のボランティア」から「手話コーラス」が即座に導き出されることはないという記述上の問題がある。したがって、これらの2つの記述の間に理解を補助するためのステップを導入する必要がある。「心のボランティア」の次の発話で、司会者は「演奏曲目は」と言い始めているが、最終的には「お客様のニーズに合う演奏」という点に話を落ち着かせようとしていることが分かる。「ニーズ」は福祉的によく使われる語であって、最初は曲目という音楽の内容を話し、次に心のボランティアから手話コーラスに繋げるために入れられている。

しかし、それは十分に奏功しているとは言えないため、「音楽と福祉をテーマになさっています」という言葉が付加されている。福祉という言葉がないままには「手話コーラス」という話の流れが十分には納得できない可能性があるという予測のもと記述の配置を組み立てるというのがその眼目である。

事例2でも、3つの記述は紹介しなければならないアイテムとして扱われている。短時間でこの3つの記述を関連付けることが司会者の課題となっている。事例2では、ソリストの説明の中で曲目という説明を既に使用したため、3つの記述を繋ぐ道具としては使用されていない。その代替として、障害者が運営に参加し活躍しているという説明の流れで「手話コーラス」という記述が導入可能となっている。

いずれにせよ、事例1と事例2では、「心のボランティア」という抽象的な言葉では手話コーラスを含んだオーケストラの意味を十分に説明できないため、それぞれのコンサートでは、3つの記述をつなぐための補足的な説明が挿入されていることが分かる。

3つの記述のうち活動開始年は、標準的なプロフィール紹介の方法である。活動開始年から導き出される30年弱の活動期間は非営利団体・ボランティア団体としては歴史があるというイメージを受ける説明の方法である。それは、組織の堅実さや安定性、信頼性を含意する。また、万人の標準的な座標を用いて客観的な座標の中に位置付けることで、公式の歴史を有していることがアピールされている。すなわち、活動開始年を述べるということは、長年活動しているという信頼性に加えて、パブリックな歴史の中にそれを位置付けるという意味も有する。

以上のように、事例1、事例2ではいずれも3つの記述が提示されていることを見てきた。しかし、この3つの記述の配置は代表が普段に語るαの歴史とは異なっている。代表によると本団体は、生演奏に触れる機会のない人に出張演奏を無料で行う活動からスタートした。活動を行ううちに、代表者に障害があるということから、障害のある団員も徐々に入団するようになった。その後、自然災害のために団員が減少したものの活動は継続し、近年になって手話コーラスの団体と一緒に活動するようになったという時系列

となっている（図１）。したがって、事例2のように「障害者が主体的に活動している」という説明づけ・アピールは元々のものではなく時を経て形成されてきたことになる。

代表・団員に知られている内容と団の紹介が異なっていると思われる内容は他にもある。ある団体、そして団体を構成する人たちを紹介するという活動は、その場にいる人たちを組織づけ、カテゴリーをつくる活動でもあるといえる。例えば、事例2では、代表や司会者が「お楽しみください」と述べており、聴衆は「楽しむ」べきものだという組織付けがなされている。本団体は障害のある人とない人がともにボランティアの担い手となっているが、内情を知らない観客から見ると、障害のない団員は「ボランティア」を行う人、障害のある団員は「ボランティア」の対象として組織付けられる可能性がある。

また、事例2の「運営の担当」というのは、車いすユーザーである代表のことだとして聞き手には理解されそうである。というのは、可視化されない障害や疾病のある団員が多く参加しているが、そういった団員は演奏者席や客席に座っているため目立たない。内実を知らない人が見れば、代表、A、指揮者を見たとき、代表を「運営の担当」に位置付けるだろう。代表としてその場に参与し、車いすユーザーで、なおかつ指揮も演奏も行わない人を、聴衆は運営の担当として位置付けるだろうからである。また、先述したように、事例2では、障害のあるAさんは「ボランティア」の対象と組織づけられる可能性がある。

このように、αでは演奏会で外部者に対して社会的な位置づけを示す際に、説明が省略されていることで団についての歴史的な記述やその場の参与者のカテゴリー配置が曖昧になっているといえる。そして、αの関係者は誰も代表や団員に知られている内容とは異なる、そういった記述やカテゴリー配置を否定したり誤解を招かないように詳細に説明したりすることもない。

5.3 団員募集

休日音楽家が参加するアマチュア・オーケストラは全国に約800団体[1)]ある。各オーケストラはメンバー確保のために趣意工夫を凝らして団員の募集を行っている。多くの団体は、オーケストラ募集の専用サイトに掲載するか、ホームページを用意し団員の募集を行っている。これらのサイト上の情報をもとに、演奏曲、活動場所、練習頻度などを確認したり、演奏会を見に行ったりして団体に見学願いを出すこととなる。

ホームページはそのデザインや見やすさはもちろんのこと、表記内容によって見学・入団希望者数が変化することが予測される。αのホームページでは、福祉的な内容に関心のある団体であることを示唆しつつも、それを強調しすぎない構成になっている。

ホームページにおいても団の紹介が「○○年」、「心のボランティア」、「手話コーラス」というキーワードがある。そして、その時系列は曖昧に書かれている。また、障害のある人が運営スタッフとして活躍する旨は１行書かれているものの障害のある人が演奏者として在団していることは書かれていない。ホームページ管理者としては曖昧性を維持することが肝要と感じている。

なぜなら、福祉や障害のある人の参加や社会的包摂について大々的に表記すると、当該問題に関心のある人からしか問い合わせが来ないためである。そもそも楽器を演奏可能な人のうち福祉的な問題関心のあ

る人はそれより格段に少ないため入団希望者がほとんど無いという事態になりかねない。旧ホームページで団員募集をしていた時期は、そういった点を十分に工夫出来ていなかったため入団者がほとんど無かった。現在は、福祉的な活動を暗示しつつも詳細は書かれていない。

このような説明が省略され曖昧な作りのホームページは、外部の人からどのように見えているのだろうか。これを知る手掛かりとして、αへの問い合わせが参考となる。2016年3月にホームページリニューアルと同時に筆者がホームページ管理担当となってからホームページを経由した問い合わせ内容を見てみよう。2019年6月30日現在までにあった問い合わせは合計で99件あった。このうち、見学・入団希望に関連するものが36件（36.36％）、演奏依頼が30件（30.30％）、宣伝3件（3.03％）、その他問い合わせ3件（3.03％）、誹謗中傷・いたずら27件（27.27％）であった。

見学・入団希望に関連する36件では見学・入団の前に知りたい内容・不安要素について知ることが出来る。そこで、内容をカテゴリーごとに分類し表2にまとめた。なお、一つの問い合わせに複数のカテゴリーが付与されることもある。

見学・入団に当たっては、演奏する曲、演奏レベル、演奏会の時期、演奏会の回数、構成人数、練習の日時・場所などを勘案している様子が伺える。ここで着目すべきは「障害者のオーケストラ」という文言である。本文言は問い合わせの文章から引用したものである。確かに、先述したようにホームページやアマチュア・オーケストラの専門サイトにおける団員募集のページを注意深く見れば障害のある人が参加している旨は記載しているものの、活動の詳細は明確ではない。ここでは、質問者は、「障害者のオーケストラか否か」を特定するための質問を行っており、ホームページ上の説明において団体の社会的カテゴリーは明確でない様子を見て取ることが出来る。

表 2　見学・入団にあたって知りたいこと、不安要素

内容	件数（％）
演奏歴・自分の演奏レベル	21（21.65）
楽団の演奏レベル、入団試験の有無	4（4.12）
全体の人数・参加希望パートの人数	1（1.03）
演奏会の頻度、時期	1（1.03）
練習日のタイムスケジュール	1（1.03）
「障害者のオーケストラ」か否か	2（2.06）
自身の障害	2（2.06）
全員が障害者で構成される音楽団体の紹介希望	1（1.03）
団楽器の有無	1（1.03）
規定楽器以外で参加可能か	2（2.06）
人間関係	1（1.03）
計	37

αは障害のない人もある人も参加している団体であり、「当事者団体」とも、よくあるアマチュア・オーケストラとも異なった存在である。αに所属する障害のある団員で、「障害者のオーケストラ」でないから入団したという人もいる[2)]。一方で、問い合わせにあるように、「障害者のオーケストラ」であれば

入団を希望するが、もしそうではない場合は、他の「障害者のオーケストラ」の紹介を希望するような人もいる。

本事例では、当事者団体のようでそうではないという団体を維持することの困難さが、表れていると言える。αでは通常のオーケストラに参加し辛い人をも確保し、多様性を確保することを重視する。その一方で、人数が少ないと演奏可能な楽曲が少なくなり団員の気力も低下するというジレンマがある。

したがって、「障害者団体」、マイノリティのための団体にカテゴライズされることで、入団者が激減し団体の存続が危うくなることは避ける必要がある。αとしては、オーケストラを探している人の入団候補から外れずに、まず見学に来てもらうことが重要である。マイノリティ向けの団体としてカテゴライズされる可能性がある中、曖昧さは戦略的に使用されているといえる。

5.4 記述、カテゴリーとその曖昧さ

本章では、外部者とのかかわりが発生する場における言語表現を通じてカテゴリーとその曖昧さについて分析を行ってきた。αに対してどのような説明がなされるかで、その印象は大きく変わる。αでは状況に合わせた説明がなされていることが理解できる。

このような、その場にいる人々をカテゴライズして組織付けすることや団の歴史の記述は、そのたびに設定される「オケージョンドコーパス(occasioned corpus)」(Zimmerman and Pollner 1971)であり、その場の運営に寄与する知識体系である。オケージョンドコーパスは、活動の参与者による産出と認識的な活動の偶発的な達成である。いかなる状況のいかなる構造的特徴も、その状況に対する参与者の活動から生じたものであり、それらの活動とは独立しては存在しえない。そして、参与者が状況の中で認識された規則性、目的性、典型性は、その特徴の認識の中で、さらにその機会に行われた仕事の達成として考えられる。

オケージョンドコーパスとしての曖昧さの達成は、「○○年」、「心のボランティア」、「手話コーラス」という記述や人々を組織づける活動によって観察可能となっていた。特に、３つの記述の配置は、その場ごとに適切な形でつなぎ合わされていた。記述をつなぐ部分が、活動とともに変化してきた部分でもある。この変化してきた部分は、ボランティアというαの元々の活動主旨から説明すると冗長になるため、α自身もブランクにしており、その場に応じて臨機応変につなぎ合わせていると言えそうだ。αはその活動が長年継続することによって、提供者と被提供者の融合というテーマや、演奏者と聴衆の交代というテーマなど、団体を構成する様々な要素が増加している。「音楽による心のボランティア」は非常に曖昧な目標でもあるが、様々な要素を含むような形で、楽団が成長するための傘のような役割を有している。

このように、αは団体の成長には曖昧さは重要であり、外部への公式な広報・宣伝といえるようなところにも曖昧さが反映されているように思われる。そして、αはその曖昧さを積極的に受け入れているように見える。団員の様子を直接見ることが出来ないホームページにおいては、「○○年」、「心のボランティア」、「手話コーラス」という３つの記述を連結させるにあたって、障害のある奏者が参加している旨の説明は無い。αは、「障害者団体」とか「一般の市民オーケストラ」といったカテゴリー付与を避けながら、社会的に曖昧な存在として浮遊しているといえる。

6．結語：αにおける曖昧さとその意味

本稿では、αの集団内の秩序や団体外部との関わりにおける公式な言語表現に表出する曖昧性に着目し分析を行った。αでは企業におけるダイバーシティ・マネジメントのように公式の規則を変化させていくことで対応するのではなく、公式の規則の大半を無効化し、また多義性を持たせ曖昧に運用することにより対応していた。オーケストラはその形式性や同調性により障害のある人にとって非常に参加し辛い団体であることが示されている（Lubert 2011）。αの場合は、クラシックという音楽ジャンルやパフォーマンスの仕方に一定の制限を受けているものの、それ以外の参加の方法やスタンスにおいては自由度が高い様子が見て取れた。αの曖昧さは、多様な背景のあるメンバーの参加の確保には非常に重要なものではないだろうか。

αにおける曖昧性の長所は次の４つが考えられる。第１に、目標や規則の内容とその運用が曖昧であることで、集団としてはその場ごとの状況や経年変化に対応しやすい点である。

第2に、曖昧であることにより、同調圧力の度合いが下げられているといえる点である。「～でなくてはいけない」、「～であるべきである」という規範性を感じる場面が少ないこと、そしてメンバーシップ性が曖昧なことで、障害や慢性疾患のある人だけでなく、すべてのメンバーが各自のスタンスで参加し、気兼ねなく欠席と休団ができるように思われる。その結果、新メンバーも参加しやすくなるとともに、楽団が一定の規模を保ったまま活動を続けていくことを可能にしている。

第3に、障害の有無を開示せずとも参加しやすい場が確保されている点である。参加者それぞれが様々な事情・背景を有していることを集団の前提としているため、障害の有無や属性を開示しなくても当然に助け合いの相互行為や配慮が見られるのである。

第4に、外部への自己提示の仕方を曖昧にし「一般のオーケストラ」とか「障害者のオーケストラ」という社会的なカテゴリーから浮遊することで、社会福祉や障害者の社会参加といった問題に関心のない人からのアクセスを確保している点である。これは、団体の他者性を排除する一つの方法であるといえる。

以上のように、αは約30年のうちに曖昧さを発展させ、その曖昧さをその場ごとに管理・利用していた。そして、その曖昧さは10代から80代の広い年齢幅、慢性疾患や障害の有無、様々な演奏レベルの奏者など多様な背景を有する人に寛容に対応する土壌を醸成しているといえそうである。一見自然に生起しているように見えるコミュニケーションの特徴も団体運営のやり方によって制限・促進されるという社会的に構築されている側面がある。曖昧さのある空間の中で起きている、αの社会的包摂の方法は多くの集団で起きるわけではない。企業におけるダイバーシティ・マネジメントの方法とも大きく異なるし、αの曖昧さに関連して前述したような「事件」の他にも、過去に大量離反者が出るという事態も起きている。このように、α独特の緩さ、曖昧さは社会一般に受容されるわけではないかもしれない。それでも、αはこうした危機を何度か経験しながらも、組織として存続している。そして、αでは結果的に共生社会が実現しておりその意義は大きい。αの重要な特徴である曖昧さは、共生社会に向けた一つの示唆となりうると考える。

付記

本稿は筆者の博士論文「表現活動における障害と社会：障害者が参加する音楽団体を事例として」（2020年度大阪大学大学院人間科学研究科博士論文）の第7章の一部を加筆・修正したものである。

文献

[1] 有村貞則，2014,「ダイバーシティ・マネジメントと障害者雇用は整合的か否か」『日本労働研究雑誌』616：51-63.

[2] Davenport, S., & Leitch, S., 2005 “Circuits of power in practice: Strategic ambiguity as delegation of authority”, *Organization Studies*, 26(11): 1603–1623.

[3] Edenfield, A.C., 2018, “The Burden of Ambiguity: Writing at a Cooperative”, *Technical Communication*, 65(1): 31-45.

[4] Eisenberg, E. M., 1984, “Ambiguity as strategy in organizational communication”, *Communication Monographs*, 51(3): 227–242.

[5] Eisenberg, E. M., 2007, “*Strategic Ambiguities: Essays on Communication, Organization, and Identity*”, CA: SAGE Publications.

[6] Eisenberg, E., & Goodall, H., 1997, *Organizational Communication: Balancing Creativity and Constraint*. New York: St.Martin's Press.

[7] Garfinkel, H., 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Cambridge: Polity Press.

[8] Kelly E.,& Dobbin, F., 1998, “How Affirmative Action Became Diversity Management: Employer Response to Antidiscrimination Law, 1961 to 1996”, *American Behavioral Scientist*, 41(7): 960-984.

[9] Lubert.A，2011，*Music, Disability and Society*, Philadelphia：TEMPLE.

[10] 正井佐知 , 2017,「障害のある奏者のオーケストラ参加――医療・福祉従事者の関与しない環境に着目して」『ソシオロゴス』41：112-129.

[11] 内閣府，2009,「障害者に係る共生社会実践活動事例集」.
（https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/tyosa/h21kyousei/index.html）2019 年 10 月 20 日取得。

[12] Pomeranz, A., 1987, “Descriptions in legal settings”. In G. Button and J.R.E. Lee (ed.), *Talk and Social Organization*, Clevedon, England: Multilingual Matters Ltd, 226-243.

[13] 谷口真美，2008,「組織におけるダイバシティ・マネジメント」『日本労働研究雑誌』574：69-84.

[14] 牛尾奈緒美・志村光太郎，2008,「障害者雇用とダイバーシティ・マネジメント――特例子会社スミセイハーモニーを事例として」『情報コミュニケーション学研究』18：81-95.

[15] Zimmerman, D.H. 1971, “The Practicalities of Rule Use”, in J. Douglas(ed.) *Understanding Everyday Life: Toward the reconstruction of sociological knowledge*, London: Routledge & Kegan Paul, 221-238.

[16] Zimmerman, D.H. and Pollner, M., 1971, “The everyday world as a phenomenon,” in J. Douglas(ed.), *Understanding Everyday Life: Toward the reconstruction of sociological knowledge*, London: Routledge & Kegan Paul, 80-103.

注

1）「オケ専」(https://okesen.snacle.jp/) に掲載されている団体の件数 である。2019 年 11 月 14 日検索、情報取得。

2）2018 年 9 月 12 日聞き取り。

The Meaning of Ambiguity for a Diverse Orchestra Group

Sachi MASAI

Abstract:

This paper discusses the role of ambiguity in the management of Orchestra α, a group in which people of diverse backgrounds have participated for 30 years. Ambiguity was considered to have fallen from use in previous studies. However, in α, ambiguity was found in many situations. To clarify how ambiguity is used in α and what it means for the group, two scenes are analyzed: one demonstrating the relationship between α and an outsider to the group and another illustrating the relationship between members of α. The findings show that ambiguity was used for various purposes: (1) to respond easily to situations and long-term changes, (2) to reduce formativeness, (3) to create a place where it is easy to participate without having to talk or not talk about disabilities, and (4) to ensure the participation of people who are not interested in issues such as social welfare and social participation of peoples with disabilities.

Key Words : ambiguity, organization, people with disabilities, the elderly, social inclusion